

日本キャリアデザイン学会 キャリア政策研究・国際交流委員会主催 市民公開特別研究会
東日本大震災後のキャリアデザインについて考える(3)

岩上安身氏 (ジャーナリスト/IWJ 代表)

『百人百話』—故郷にとどまる 故郷を離れる それぞれの選択—

2012年6月23日(土)17:30~20:00

法政大学市ヶ谷キャンパス

【司会：上西委員】

ではこれから、日本キャリアデザイン学会キャリア政策研究・国際交流委員会主催の市民公開特別研究会を始めさせていただきます。

本日、講師としてお迎えしましたのは岩上安身さんです。皆様はよくご存知の方だと思いますが、私自身は震災前まで存じ上げておりませんでした。震災後、原発がどうなっているのかがまったくわからず情報を探していく中で、岩上安身さんや、岩上さんが代表を務められている IWJ という存在を知りました。岩上安身さんによる小出裕章氏に対するインタビューなどを拝見しながら、情報を集めていった経緯があります。

今回ご講演いただく岩上さんの著書『百人百話』は、一人ひとりがどういう思いで 3.11 を迎え、その後を過ごしてきたのか、特に福島の方々はどのような思いなのかが綴られています。本当に丁寧に取材されており、実際に聞き取りをされた方から福島の声を聴きたいという思いで岩上さんに来ていただきました。

それでは、当委員会の大庭から趣旨説明をさせていただきます。

【大庭委員】

日本キャリアデザイン学会キャリア政策研究・国際交流委員会副委員長の大庭と申します。キャリアデザイン学会では、キャリアの研究者や実践者が集まり研究を続けています。その中でキャリア政策研究・国際交流委員会では、2011年3月11日に東日本大震災が発生した直後から、この震災は人々が「働くこと」や「生きること」に大きな影響を及ぼすであろう、そして価値観などパラダイムの大きな転換を迫るものでありと想定しました。

そのあと実際にどんな影響があるか、まずはキャリア支援の現場の状況をできる限り正確に把握して、学会員の皆様と情報の共有を始める必要があると考えました。実際どのようなことを行ってきたかといいますと、キャリア、生き方や働き方に対する意識の変化に関する会員アンケートを去年の6月に行いました。そして2度目のアンケートをその1年後の先日、行っております。また、今回3回目になりますが「東日本大震災後のキャリアデザインについて考える」という研究会を通じて、皆様とともに考えてまいりました。

今回岩上さんをお招きしてお話を伺おうと思いついた経緯に関しましては、先ほど上西

から説明があった通りで、岩上さんは、震災を体験した方々がこれまでの1年余り、何を考え、何を感じ、どう行動し、どの様に生きてきたかをインタビューを通じてつぶさにご覧になってきたと思います。そのことをキャリアデザインの視点からみていくと、人々が予期せぬ出来事に遭遇した時に、どの様にその予期せぬ出来事を体験し、その体験を踏まえて、自らの「生き方」をどのように作っていくのかを考えていくことに通ずるものがあると思ったのです。

今日は福島の人々がどのような思いでどのように行動し、故郷にとどまる選択や故郷を離れる選択を行ったのかということを通して震災後の「生き方」について考える機会にしたいと思います。

趣旨説明に示されている質問（下記）はすでに岩上さんにお伝えしてあります。

- * 震災直後から現在に至るまで、そして今後に向けて「ふくしま」の人々がどういう思いで生きていこうとしているのか、時間軸にそって見ていきたい。
- * 「ふくしま」の人々がどういうプロセスで「福島にとどまる」「福島を離れる」という選択（意思決定）をしたのか、そしてその選択に影響したものは何なのか？
- * 予期せぬ転機にたった時に積極的な方向性を見出していける人は何が影響しているのか？（それまでの人生、親、仕事、市民としての活動など）
- * 家族間、世代間の葛藤は何から生じているのか？（知識・情報、危険性を捉える軸、価値観、地域特性など）
- * 1年余り経過した「今」、岩上氏はさらに情報収集される中で、どう捉えているか？

では、どうぞよろしくおねがいします。

【岩上安身氏】

皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました岩上安身です。日本キャリアデザイン学会での講演は初めてで慣れないものですから、皆様のご要望に応えられるか分かりませんが、なるべく趣旨にそってお話ししていきたいと思います。

『百人百話』というタイトルで、福島の方々から百人と決めてインタビューを始めました。私はソ連崩壊の時期、そしてその後の民主ロシア誕生の時期の約6年間、旧ソビエト連邦の地域を行き来しておりました。89年に行った時、「ソ連は均質な社会主義国だから、均質な人々の集まりだ」と言われていたので、そう思って行ったところ、驚くほどの多様性があることに気づきました。ソ連という国、つまり社会主義に対してシンパシーを感じている人、それから反発している人などいろいろいましたが、どちらも見誤っていたなと感じました。いずれにしても非常に均質なソ連人像を思い描いていましたが、どうも違うようだ、あまりにも多様な人がいて多様な人生を送っているようだと思い、ソ連の人々から丸ごと聞き取りをしようと思いました。結果として共著で『ソ連と呼ばれた国に生きて』という本を書きました。百人にインタビューしたので大変分厚い本になりました。

福島の取材をするうちに、その時の手法をやってみようと思いました。福島の人たちが今直面している困難、そして困難な経験に対してどのように反応したり、選択したり、生きていこうとしているかについて、一人ひとりに聞いていくことにしました。

《地域という観点の重要性》

時系列の変化についての質問をいただいています。時間軸も非常に重要ですが、キャリアデザインにとって非常に重要なのは、地域という観点です。

福島は、大きく3つの地区に分かれます。地図の右側、太平洋に沿った浜通り、真ん中の中通り、ここは郡山と福島を結び、東北新幹線や高速道路が通る交通の要衝の地域です。それから西側の会津を含む広域にわたる地域です。これらは元から気候風土が違い、文化も違います。福島は大変広く、山などに隔てられているので、元々違う地域だという意識があります。今回の震災で一番被害を受けた所は浜通りで、被害の程度には地域差があります。福島の人についてのイメージは、マスコミを通じて情報を得ることが多いのですが、津波に襲われている映像を見てしまうとみんながその経験をしたかのように錯覚しがちです。でも、それは沿岸部の人たちで、地域によってそれぞれ違います。地域差があることを考慮にいれなければなりません。

《地震・津波と原発事故の違い》

今回の震災は、東日本大震災とひとくくりにされがちです。地震と津波は違う現象ですが、ある程度くくることはできます。ところが、その後起きた原発事故は、全く別のものです。別のものと言ってしまうと語弊がありますが、整理整頓して思考する場合は、大きく違うものと考えなくてははいけません。

何故かという、地震、津波において一番大変な時期は発生直後です。ライフラインは途絶え、大変厳しい状況になりますが、そこが苦境のピークです。もちろん近親者が亡くなれば、その悲しみは急に癒えるものではありませんが、危機は少しずつ薄れていきます。

私は生々しい時期、東北新幹線がまだ那須塩原までしか動かない時期に福島、宮城、岩手に行きました。当時は東京もまだ大変な時期でした。その時から足を運び続けています。大変な状況でしたが、地震、津波によって起きた出来事、その苦しさは段々ピークアウトしていきます。そしてどう復興するか、向かう方向も見えています。実現できるかどうかは別として、何をしたら復興なのか、どういうことが復興なのか、誰もがわかっている。そのことは、とても重要なことです。

三陸がそうであったように、福島の沿岸部も大変な被害だったのですが、現場に行くと「まさか福島の浜通りがここまでの津波に襲われるとは思わなかった」という声を聞きます。

三陸などは、何度も何度もやられているわけです。過去に経験があると、自分たちに「何が起きたか」は理解できていて、今、横にいる人たちの間でも「何が起きたか」が共有できていて、復興の仕方の議論はあるでしょうが、「未来に向けて復興が必要だ」ということに関しては、解釈が狂うようなことはありません。

ところが原発についてはそうではありません。この1年数カ月間に情報が、あるいは

情報の解釈が、目まぐるしく変わってきています。これが他の災害とは全く違います。更に、被害が終わったのかどうかもわからない。過去に起きたことがない、過去に経験がない。

日本中のかなりの人は「原発は安全だ」と思っていた。チェルノブイリ事故の直後には、「原発は危険なのではないか」という声が広がりましたが、どんどん沈静化し、特にこの10年くらいは地球温暖化問題とセットになって、「原発ルネッサンス」などと言われていました。原発は安全かつクリーンだという、原発を美化するプロパガンダがなされ、浸透していました。「原発は大丈夫であろう」と安心した空気があった。若い世代には昔の情報はあまりありませんから、そうした宣伝が浸透していったわけです。

ところが、事故が起きてしまって混乱した。被災した人は、原発について事故の全体像を理解するのに時間がかかります。ところが、ゆっくり理解している間がないわけです。同時に津波にも襲われているわけですから、避難しなくてはならない。浜通りの人たちは、一番大変だったわけです。地震と津波で逃げ出さなくてはならない。そういう状況下で大変不自由な生活をする中、原発の情報が入ってきます。

《情報の入手と理解》

情報をどこから手に入れたかが、非常に重要でした。一つはマスメディア。ネットにアクセスできたかどうかで態度・決定がだいぶ違いました。もう一つは口コミです。意外なことに、口コミというのはとても大きな効果がありました。ネットは言うに及ばずです。そのことはあとで触れられたら、また触れたいと思います。

情報を早く得ることができたか否かということは、あの時「死活的」な差を生んだわけです。早く得ることができた人、例えば福島第一原発の中で働いている友人、知人、家族、親族がいて、たまたまそこから情報を得ることができた人もいました。3月12日の最初の爆発、14日の3号機の爆発から数日または数週間にわたっては、初期の被曝を避けられるかどうかという点で、大変重要な時期だったのですが、そこで早く避難することができたか、避難の方向はどちらだったかが重要でした。非常に素早く情報を得ることができて、動けた人もいる。得ていたのに、情報を活かすことをできなかった人もいる。情報を得ることができなかった人もいる。ずっと漫然と過ごしてしまった人もいる。水をもらいに外に出て、ずっと雨に打たれていたという人もいる。

「死活的」の解釈にも議論があり、津波に襲われたら直ぐに死んでしまうのですが、放射能に被曝した場合は、いつそれがどんな形で健康被害として現れるのかという情報が様々で、その解釈をめぐる皆さん苦しんでいらっしゃいます。つまり現在、自分たちは、どの程度危険なのかがわかっていない。自分なりに情報収集して態度を決定した人もいれば、態度を決定できない人、見定めることができない人もいます。見定めても家族で議論になり、家族単位で行動する方針が定まらず、時間を費やしている人もいます。非常に難しいところです。

更に時間が経つにつれ、福島では表面上、社会が落ち着きを取り戻していくのですが、表面上の落ち着きとは別に、段々、原発、放射能、原子力政策そのものについての学習や

理解が深まっていき、それについての政治の反応やメディアの反応についても学習していくなかで、原発についてどう考えていったらよいか、底知れぬほど深いことがわかってくるのです。

例えば原発推進派は、言い分として、電力不足の問題を挙げるのですが、「電力が不足するから原発が必要か」というと、それは違うであろう、どうやら原発に頼らなくてもそれほど電力は不足しないことがわかってくるわけです。なぜそこまで強硬なのか、どうして原発を維持しようとするのかという、その背景には安全保障の問題、つまりは核武装の問題が出てきます。米国からの圧力という問題も出てきます。考えねばならないことのレベルがとてつもなく大きくなります。もし原発維持の政策がとられれば、同じような事故が起こった時、今回よりももっと酷い事故が起こることも想定せざるをえません。

とどまると決めた人も皆、悩まれています。考えねばならないことが巨大すぎてどうしてよいかわからない状態なので、原発の災害というのは他の災害、つまり人生の他の予期せぬ出来事に比べて突出して困難で、まだ全体像を理解できていない状態といえます。

《震災直後から2つの転換点まで》

時系列の話でいきますと、最初原発の事故が起こった時、我々はできるだけ早く動いて、この原発事故の影響はたいへん危険なものであるという情報を出しました。我々のような小さな独立系のメディアが先ほどのご紹介であった通り、知らなかった人に知られるようになったのは、「他のメディアが伝えなかったこと」を知らせたためでもあります。政府も東電も事実を出そうとしなかったし、既存メディアの伝え方も、被曝を避けるよう注意喚起する方向ではなく、安全性を強調する方向に流れがちでした。そうした報道を信じた人たちは、身動きしなかったわけです。

福島の情報環境上の特殊な事情を付け加えますと、山下俊一さんという方が福島県のアドバイザーになり、大変精力的に各地で安全を強調する講演会をしました。当時は情報が無いものですから多くの人が講演を聞きたがり、それを信じました。3月も4月も5月も安全感がみなぎっていて、異様な空気だと私には感じられました。福島の人たちが何故こういう情報だけを信じているのだろうと思っていましたが、大きな転換がありました。

何人かの方が証言されているので、ここが大きな転換点だったと思いますが、4月29日に東大教授の小佐古敏荘さんが内閣官房参与の辞意表明をする記者会見を行いました。そこで泣きながら「被曝限度量が大変高い。校庭の利用基準を20ミリシーベルトにすることは受け入れられない」と言いました。この小佐古さんの会見は既存メディアに載りました。

私が小出裕章さんらにお話を伺ってネットに流し、またはツイッターに流すとして、そこで情報を得ることができる人は、ネットにアクセスしていた人だけです。多くの人たちは、新聞・テレビなど、既存のマスコミに頼っており、そういう情報を得ていなかったのです。このような情報が届いたのは、この小佐古さんの会見の 때가初めてだったようです。内閣の中枢にいる人がその様に言ったことで、初めて危ないと気づいたようです。それまでの日ごろの生活で被曝してしまったと感じたようです。ここが非常に大きな転換点だっ

たように思います。

もう一つの転換点は、東京大学アイソトープ総合センター長の児玉龍彦教授が4月27日に衆院の厚生労働委員会で政府の対応に対して厳しく批判した時です。この演説も、人々の心を大きく揺さぶりました。除染の必要性を初めて語られました。地域の違い、被災の程度の違いなど色々の違いがあり、ひとくくりにできないのですが、放射能の危険性を知りえた人、最初の爆発で強制避難した人は別として、多くの人は油断していたところがありました。気づかず、政府がきちんと事実を知らせず、SPEEDIなどを公開せず被曝してしまったのですが、この2カ月の間に気づき始めた。長く原発に反対し続けてきた多くの知識人たちも、福島に入って講演会をし始めました。講演会の生の声が浸透し、ネットや口コミが広がり始めて「放射能は危ない」という不安感が福島県内に広がったわけです。

《避難への動き》

それが避難行動にあらわれた人もそうでない人もいますが、ここから大きな曲がり角がきます。4月の新学期が始まる頃です。3.11は春休みでした。多くの人たちは家族を中心に生活を営んでいます。とりわけ福島は農村部だけでなく都市部にも農村の共同体の名残があります。地縁や血縁や親戚の付き合いとかが強固で、それを大事にします。個人や核家族の単位での判断だけでは動けない人も多いのです。家族の合意がないと避難する決断が難しかった。とりわけ、避難の判断を難しくしたのは子どもの存在でした。就学している児童を持っている家庭は、一旦緊急避難しても学校の再開に合わせて戻ってきました。帰ってきてよかったのかと不安に思う人たちも多かったのです。5月、6月には情報が浸透してきました。夏休みに一時疎開や保養などたくさんの企画がたてられ、全国各地からお誘いがあり、多くの人が一時的に県外に出ました。県外に出たことを契機に避難を決めた人たちもいました。ですから9月が一つの節目になりました。夏にかけて除染への期待があがっていきました。その頃には放射能に対する知識も増えていき、ガイガーカウンター、線量計を持つ人も増えていきました。既存のメディアからの発表だけでなく自ら計ったり、自ら情報を得たりする人もどんどん増えていきました。

除染への期待が膨らむ一方、除染の効果についての議論も二つに分かれました。やがて「この議論がバラ色の解決策になるのでは」という期待感が萎んでいき、「除染したところで、そう簡単にも何もかも解決できるものではない」という失望感をもちつつ、それでもやれる事はやってみようという状態が続いています。年をまたぐ頃には多くの方は、特に原発推進派の人や原発事故を大きくみせたくない人たちは「議論はもう落ち着いた」と言っていました。確かに表面上の議論は沈静化していきましたが、実際には県外への流出は止まりません。一時的には興奮して言い合うようなこともあったでしょうが、元々福島の人たちは家族同士で、職場で、地域で言い争うということは好まないと言われています。

約200万の人口のうち約2%の4万人もが県外に出てしまいました。主に子育て世代が県外に出ているので高齢化が一層進行してしまいます。それから家族が分れて住まわなくてはならない難題、仕事の問題、学校の問題が生じてくる。2%程度が出て行ったといっ

でもそれは県外への流出です。県内での移動も多く、はっきりした数字は分りませんが何万人もいます。推測では16万人ともいわれています。どうしようもなく避難しているのではなく、落ち着いて引っ越しをしている、つまり線量の高い所から低い所へ移動している人が増えています。福島を一律に扱えないというのはそういう事情もあります。人が流出してしまうことで「自治体の崩壊」、「共同体の崩壊」だと危機感をもっている所もあります。

《不動産の処分、家族それぞれの思い、共同体の束縛》

同じ浜通りでも南部のいわき市では逆に人口が増えて潤っています。県内の、もっと線量の高い地域から引っ越してきている人が多いのです。いわきから避難したある人は自分の家を手放して西日本に行く時、家が二束三文になってしまうと嘆かれていました。ところが実際に打診してみたら、家の値段が上がっていた、と語りました。不動産を処分できるかどうかは大きな問題です。国が暴落してしまった不動産を補償してくれるのかどうか動けるかどうかに関わります。そこでも明暗が分かります。そのような明暗があるデリケートな話は、なかなか公には語られないので、コツコツと聞き取りしないとわからないのです。

また家族同士の意見の食い違いの問題もあります。典型的なのは母親が子供のことを心配して早く逃げたいと願うが、父親は仕事を心配して大丈夫だと反対するパターンです。また逆に奥さんは「離れたくない」と言い、旦那さんは「外に出たい」と言うパターンもあります、私の取材に対し、「離婚寸前だ」と泣きながら答えた男性もいました。男女の差もステレオタイプに割り切れないところもあります。

首都圏や関西圏のような大都市圏で事故が起きても同じような苦しみを味わうことになるでしょうが、大きな差は福島では「共同体の束縛」といってしまうか、「周りの皆と一緒に大事」という同調圧力が高い点があげられます。「東京の人だったら周りのことを考えずに、核家族だけで避難する決断ができるのでは」と福島の人に言われたこともあります。やはり地域性を考える必要があります。

福島には「隣組」が生きています。私は東京で生まれ育ちました。両親は戦中世代なので東京にも「隣組」があったことは聞いています。でもそれは戦後で終わったと思っていました。福島では、地域ぐるみで何でも一緒に行動する「隣組」が今日でも生きており、その和を乱すことは心に大きな負担を感じるらしいのです。かなり早くから西日本に避難された医師がいて、「自分が他の人を見捨てた」という自責の念から精神的に病んでしまったということもお聞きしました。共同体から離れるというのは苦しいことのようにです。

また福島には「人足（にんそく）」という聞きなれない言葉があります。「人足」というと肉体労働者のような意味に聞こえますが、「人手」というような意味です。

例えば村々の用水路の補修など、公共事業ではできない所に人手を出し合うこと。これを「人足」というそうです。家から男手を出さない場合は女性を出す。そうすると共同体に対して「借りができた」ことになるそうです。人手を出せないならお金を出さねばなら

ない。ずっとお金だけを出したり、女性しか出せなかったりとなると、暫くは見逃してもらえても、それが続くと住みづらい状態になるそうです。こういう社会では、そこから離れるということがどれだけ難しいかと聞かされました。理解するのが難しいところですが、こういう要素もキャリアデザインを考える上では考慮に入れなければならない課題だと思います。

《先行きの不透明さ》

年をまたいでも悩ましい状況は変わりませんでした。まず一つには被災者に対する補償や生活再建の抜本的な解決策が提示されませんでした。提示金額は「雀の涙」のようなもので、それでは生活を再建できません。

それから、他の震災事故と同一に語れないところですが、今後どうなるのかわからないという問題がある。表立っては再稼働問題といえば大飯原発の話です。ところが大飯だけでなく伊方も泊も準備が進んでいます。驚くことに福島第二を再稼働させる準備が着々と進んでいます。これはメディアに出ません。福島市や郡山市や会津の人たちは情報を知らないかもしれませんが、浜通りの人たちは、自分自身が原発で働いていなくても、身近な自分の親族や、友人や、近所の人が働いているので口コミ情報があるわけです。私は先日いわきに行って、何度も会っている人から話を聞いたところ、その人の親しい友人が福島第二で働いており、その友人は「再稼働の準備が進んでいる。再稼働するしかない。でないと自分の給料が出なくなる」と言っているというのです。身近な人たちが原発に依存しているのです。そういう人たちが身近に多いと、原発を終息させたいと思っても、もう一度あんな事故があったら立ち直れないと思っても、それを周囲に面と向かって言うことができないストレスを抱えています。

原発の被害はとても複雑で他の災害とひとくくりにはできない、今後どうなるのかわからないのです。情報収集して、分析して、考えて、自分がどう生きていくか、周囲の人間と社会とどう調和したり、折り合ったりして人生の選択を組み立てていくのかは、情報の収集と分析にもとづき、個々人で決定する作業だと思うのです。でも決定しきれない、情報を収集しきれない、解釈しきれない、集めても集めてもまだ足りない、まだ不確実で何かを隠されているかもしれない状態にあり、考えることを止める人がいます。一時期はネットで情報を集めたり、講演会に行って情報を集めたりしたけれども疲れてしまって、考えるのを止めてしまった、という人もたくさんいます。考えるのを止めたままにしている人も、一時期止めたというだけの人もいますが、考えるのを止めたところで、問題が解決するわけではなく、大変難しい状態にあります。

原発災害においては、最初の爆発が起こってからその影響がすみやかに、確実に、低減していくとは言い切れません。自分の身に起きたことがその時には分らず、後から段々と大変なことが起きたと分っていく。多くの人たちは、あまり声には出さないものの、チェルノブイリの事故の経験から4、5年経ってから色々な形で晩発性の不調が現れるのではないかと恐れています。甲状腺ガンなどはそのタイミングで現れましたから。未来に向けて、まだ起きていない不安があるのです。「数年経って具合が悪くなったら、その時初めて

自分が避難しなかったことを後悔するであろう」と語る人もいます。本当にどうしていいかわからないと悩む人もいます。これから何十年もこのストーリーは続いていくでしょう。ガンを発症する人も、しない人もいます。被曝による影響は、人それぞれで、皆を一律には語れないわけです。ですから大変苦しい局面に立たされているのだと思います。

色々な価値観の持ち方があると知らされたのは、お子さんが二人いるご夫婦で、ご主人は「子どもを避難させたい」、奥様は「避難させたくない」と言い争ったケースです。奥様が「みんなと一緒にないと嫌だ」と言うので、ご主人は「皆と一緒にガンになってもいいのか」と問い詰めたところ、奥さんは「皆と一緒になら、子どもがガンになってもいい」と言ったそうです。その話を聞いた時、これはわからないと思いました。その奥様は真剣にそう思って言ったのでしょう。またご主人はそう言われてショックだったと思います。同調圧力が強くて「同調していれば安心だ」「皆と一緒になら悲劇を受け入れられる」と思っている人もいます。いくら一緒にならよいとはいっても、例えば晩発性のガンについても確率的なものなので発症する人もしない人も出てくるでしょう。その時は別の段階の苦しみが生じるのであろうと思います。

《経済的な事情》

キャリアデザインということになると経済生活ということになります。3.11の影響は、何のご商売をやっているかにもよりますし、どの地域にいるかでも大きく違います。壊滅的な打撃を受けている人もいます。例えば相双地区と言われる浜通りの原発の近くにいた人たちは、警戒区域なので帰れません。商売の拠点や、住宅にアクセスできないのです。最初は帰れると思っていた人も、段々事態の深刻さが分ってきました。それに対して距離のあるいわきのような所は、人が増えて潤っているという皮肉な現実があるわけです。

もう一つよく耳にするのは、「補償等が公平でないと嫌だ」という声です。例えば、市町村をまとめようとしてもまとまりません。それは被害の程度によって被害金額が変わるので、一つの町にまとめるとその中で分断が起きてしまうからです。人の幸福とは難しいもので、たとえわずかな金額でも隣の人と横並びで一緒にもらえれば幸福を感じるのですが、これが異なると苦しい思いをするらしいのです。これは現地に行かないとわからない話ですが、本音であらうと思います。

震災直後は皆が必死になってお互いを助け合いました。その相互扶助の様子に、世界から称賛の声が寄せられました。しかし時間が経つと、県内の避難でも上手くいかなくなります。私は春先に浜通りで取材をして、中通りを通って、会津に1日で移動したことがありますが、浜通りには雪がまったくなく、中通りには少し雪が残り、地面が濡れている程度でした。ところが、同じ日、会津は大雪に見舞われていました。大変な違いです。会津に行って浜通りの人が住む仮設住宅で取材をしたのですが、「雪おろしの経験がないので大変だ」とこぼされました。

《気候・風土の違い》

津波、原発被害を大きく受けた浜通りの人が会津に行っても、気候や風土が全く違うので、同じ福島県内の移動でも直ぐには適応できないのです。ですから浜通りの人はできるだけ浜通りに行きたい、同じ気候のところに行きたいのです。一方、会津の人は比較的地震や津波の被害が少なかったので、ダイレクトにはそれほど被害を受けていないのです。だからこそ同じ県内の苦しんでいる人を受け入れて、助けたいと一生懸命尽くしたのに、色々なトラブルが生じたと聞いています。自分たちが差し入れたおにぎりを喜んで食べてもらえなかった等々の話がありました。

どうしてこのようなことになるのか。これは実際に聞いた話ですが、会津の人が落ちていた避難者の貯金通帳を見てしまったら、普通預金に3000万円もの記載があったらしいのです。浜通りからの避難者の方が落とした通帳でした。会津では農村が多く、家や田畑があり、食べることは不自由しないものの、現金収入が少ない。現金収入が少ない所に、現金を持っている人たちがやってきた。地域によって所得格差がかなりあり、自分たちが世話している相手のほうが金持ちではないかと心を波立たせ、ぱったり避難所へ支援に行かなくなったという話もありました。

少々、貯金があったところで、地震や津波、原発事故に直撃されたら、急には生活再建できるわけではありません。浜通りから避難した人の中には、まだ仮設住宅で生活している人もいます。長い目で見て人生を再設計して再建していかなくてはなりません。しかし、地域の差や所得格差に突き当たった時、思いがけない人の心の揺れ動きに直面し、手を取り合っていたのに口もきかなくなってしまうということが起きてしまいます。このような話は美談ではないので、伝えにくく、既存のメディアでは報じられません。しかし実際に足を運んで話を聞くと、こうした話の積み重ねで、聞き心地の良くない話が積み重なっていく。どうそれを受け入れながら周りとの調和して次に進んでいくかを考えなくてはなりません。

《動きやすい人、動きにくい人》

もう一つの話としては家族間、世代間の葛藤から何が生じているのかをお話しします。その前に予期せぬ転機に立った時、積極的な方向性を見出していける人は何が影響しているのか。

一般的には、何かの「プラスの要素」を持っている人が動きやすいのではないかと思います。例えば情報を得てそれを咀嚼して冷静な判断ができる、知的能力が高い、社会的な関係性を持っている、動こうと思った時に現金がある、人の助けがあるなど、恵まれている人が動きやすいと思います。

ところが、「マイナスの要素」と言っただけは言葉が適切ではありませんが、それが逆によかったパターンもあります。シングルマザーまたはシングルファーザーのケースでは「普段の生活は大変だったが、シングルの状況であったからこそ、避難に関しては身軽に決断し行動できた」「大変な葛藤を背負わずに人生の選択ができてよかった」という人が何人もいました。これは思いがけないことでした。家族が円満で、舅、姑とも同居し、一つの家庭を営んでいるのは、もちろん素晴らしいことですが、その分身軽に行動できなかったと嘆いている人もいました。姑と嫁の関係において日ごろは潜在化していても、こんな時

ラスの方向ばかりでなく、マイナスの方向に出ることもあります。姑さんと日頃、円満に付き合っていたのに、避難となったら、「自分たちだけ助かろうとして、私らを置き去りにするつもりか」とののしられた、という話はいくつも聞きました。祖父母に理解があり、孫のために「若い者だけでも」と背中を押されて避難した若夫婦のケースもあるし、「なんで私たちを置いていくんだ」と言われ、身動きができなかった人もいました。日ごろはマイナスの要因を抱えている人が、時としてプラスに働く、また逆のこともあるという例です。

土地に縛られているかどうかということは問題です。先祖伝来の土地という感情的要因だけでなく、「不動産の借入金があって手放せない」と言う人もいます。動くにあたって手に職があるかどうかも問題です。無いなら無いで開き直って動くことができますが、ある地域のみで通用するような仕事の場合、農家のように土地があるからこそできる仕事は、代替の田畑を提供してもらえらるならともかく、そうでなければ動けないという声が多くありました。

意外にも動けない代表は公務員です。県の地方公務員は県外に行けない。また、県の方針に対して、自分の考えを発言することを恐れている人も多く、そんなにも圧力がかかるものかと思いました。「放射線を恐れている、不安だ」という話をオフレコでは話してくれども、公開するインタビューには応じてくれません。ある教員に了解を得てお話を全部ビデオにとったのに、家に戻って同じく公務員で教員をしている奥さんに話したら「何でそんな取材を受けたのか、ビデオを出さないでほしい」と言われ、そのビデオは使えなくなりました。その奥さんは電話で、私に対し、「私たちにはものすごく圧力がかかるのです」と強調されていました。またその奥さんに、「福島という土地の閉鎖性もあなたはわかりません。教員、公務員であるということは、上に従わねばならないということ。少しでも上に目をつけられたらどんな不利益があるか分からない」と言われました。少し大げさに言っているかもしれませんが、最終的にインタビューを没にしたということもありました。

《葛藤の中での意思決定》

『百人百話』という本にまとめましたが、まだ第一集で、続編を出します。私は福島の人々へのインタビューを続けています。そこでは必ず、「福島にとどまるか、福島を離れるかで皆さん葛藤があったと思いますが、その意思決定をどう下したか」という質問をしています。出た人は「意思決定をした感」、「達成感」があるのです。残った人は「残ると決めた人」、「出るなど考えてもいない人」もいますが、「迷ったうえに、まだ出ていない人」の場合は区切りがついていないという思いを引きずっています。その時々々の情報が入ってきます。それによって「これでいいのか」という迷いが再浮上したり、「もうこれでいい」と自分を納得させたりします。出た人はどんどん気持ちを切り替えて新しい生活に向かって行きます。その違いがあります。

ただ外に出た人が皆、幸せかというところではなく、苦しい人もたくさんいます。色々な自治体が住宅等を提供してくれています。各都道府県みな手厚い支援をしてくれていま

すが、他所の土地ですので不安定です。職が見つまっている人もいますが、見つからない人もいます。1年とか2年の期限で手当をもらっている人、住宅を提供されている人が、期限を迎えた時どうなるのか。もしかしたら福島へ戻る人も増えるかもしれません。緊急避難した人はかなり戻っています。永住を覚悟して出て行った人も、その先で新しい生活を築きあげることができなければ、これから先、住宅の提供を打ち切られるタイミングで、戻らざるを得ないかもしれません。まだまだ決定的なことがいえない気がします。

《世代間の違い》

世代間の違いに関してお話しします。他の災害の場合は大変な出来事に対して共通の意識が持てますが、放射能のこととなりますと、どう解釈するかは人それぞれで、年齢によって違います。子どもがいる家庭では将来どういう影響が出るか不安に思いますが、年配者は住み慣れた土地から離れたくないと思う人が多くみられます。「仮に晩発性のガンになったとしても、もういい年だから仕方がない」と言い、福島産の米も野菜も食べています。「おすそわけの文化」があるので、ご近所から頂いたものを拒むことは失礼にあたります。孫には食べさせなくても、自分たちは食べるのです。

子どもたちを避難させた年配者たちの中には、「もう福島で孫には会えない。会うときは県外に出向くしかない」と嘆いている人もいます。孫のことを考えたら、その方がいいと考えておられます。一緒に暮らしていた孫と会えなくなる寂しさや、今後自分たちの子供や孫たちが福島に戻ってきて家や共同体を支えてくれることがないという悲しみもある。人生の最晩年で未来がないことに直面し、静かに悲しんでいるのです。

人生のデザインにおいては、働き盛りを過ぎたあとのリタイヤ後や最晩年の過ごし方も大事だと思います。子や孫と一緒に住めないことや、住み慣れた共同体の存続が将来どうなるかという不安もあります。お墓が失われた人も非常に嘆かれています。大熊町にあるお墓ではお墓参りができない、放射能に侵されてお骨を出せないと嘆いている方もいて、これは他の災害と違うところです。津波だけだったらお骨を取り出してお墓を移転することができますが、放射能の危険がある地域にあるお墓には、お墓参りもできない。その喪失感は大変なものようです。自分も兄弟も亡くなったときに、どこに埋葬したらよいかという思いもあります。

原発事故の被害は超長期にわたって、広範囲で、ありとあらゆるところに影響を及ぼし、人をさいなむ、また補償されないという意味では過酷なことだと思います。原発事故は戦災に匹敵、もしくはそれ以上ではないかと思えます。

ご静聴ありがとうございました。

*****【質疑応答】*****

【司会：上西】

では後半の部を始めたいと思います。まず30分ほど我々の委員会の方から質問させていただき、その後フロアの方々から質問をいただきたいと思えます。

【質問】

貴重なお話をいただきました。まず「絆」という言葉を震災後よく耳にしました。平常時はいいのですが、非常事態では共同体意識で「絆」が足かせになっているということが分りました。

また 3.11 前では表出しなかったであろう価値観同士の戦いが起こったことが分りました。子どもの避難をめぐって、夫婦の意見が対立し、離婚の危機に陥るケースなど個人の生き方の問題が起きる。これも平常時だったら起こらなかったことだと思いました。

質問ですが若者、これから社会に出て行く学生などのキャリアデザインに対する意識の変化があれば教えていただきたい。

【岩上】

地域により違いがあります。浜通りか、中通りか、会津かによって違いがあります。会津はダイレクトな影響は軽微だったが、避難者を受け入れたところでは、軋轢が生じました。それに加え風評被害を受けました。また、わずかでしたが一部のお米の汚染などの実害もありました。会津は福島第一から遠く、風向きにも恵まれてさほど汚染されなかったのに、事故前は非常に評判がよかった会津のお米がこの事故によって評判が転落してしまった。このように様々の影響が出ています。

一方、福島市では飲食店のオーナーが「実は景気がいい」と言いました。緊急支援の為にたくさんの方が来て、その人達が飲みに行き、風俗に行き「風俗バブル」が起きているのです。復興の予算がついて、外から人が来てくれれば景気がいいのです。

生産者としての利害は、ある人は打撃を受け、ある人は得をするというように様々です。また、同時にその人が、消費者であり、生活者であり、生身の人間でもあるので、自分や子供たちに放射能の影響がどう出るかも気になるのです。生産者の利害と消費者の利害は対立しやすいので、一人の人間の中で利害対立が起きてしまって、折り合いがつかないという人がいます。その結果、思考停止してしまう人もいます。

ご質問の件ですが、深刻なのは若い女性が将来を心配していることです。中には「もう結婚できないのではないか」と悩んでいる女性もいました。ところが、インタビューに応じてくれた半年後にその人に連絡したら、急に結婚が決まり、関東で暮らすことになったとのことでした。彼女の悩みは解消されたのです。彼女は「状況が変わったので、当時語っていたインタビューを外には出さないでほしい」と言われたこともありました。色々な人が色々なドラマを抱えています。

若い人の場合、キャリアデザインにおいて仕事の内容、どこで働くか、福島から出るかどうかと同時に、家族や恋人がどうなのかも大きな要因です。パートナーがいる場合は、その人の考えが大きく影響します。例えば、私が取材した宍戸慈さんという若い女性は、「私は郡山が大好きですが、県外に出ることになる」とインタビューで語っていました。「ココラジ」というコミュニティーFM ラジオのパーソナリティをされていたのですが、この方はすでに北海道に行かれました。それは彼氏が先に北海道に行き、基盤を築いていたからです。自分が将来を築いていく相手がどこにいて、どう考えているのかが大きな問題

です。単身者として頭の中で仕事をどう設計するかというより、家族をどう築くかということに結びついている、とりわけ場所の選択が重要になってきます。むしろ職種などは二次的、三次的な問題で、どこで、誰と生きていくかの方が問題だと思います。そんな声が多かったように思います。

【質問】

地縁、血縁が強く、なかなか話せないような環境の中で濃密な話を聞き、映像にも顔を出してもらっていました。インタビューを受けてくれた人たちは特別しっかりした人なのかをお聞きしたい。とても聞きにくい話ですが、それをどうやって聞き出せたのか、秘訣や心構えを教えてください。

【岩上】

それは商売上の秘密です（笑）。それは冗談ですが、特別な秘訣はありません。ただソ連での取材の話をしました。どんなひどい全体主義国家で、いつもKGBの目が光っているような国でも、人は皆、胸のうちをしゃべりたいのです。胸の内の秘密や言ってはいけないことを語りたい、誰かに聞いてもらいたいのだと思います。無理にしゃべらせているわけではなく、お話してくださいと水を向けるだけで語ってくれることもあります。色々な事情があるので、話した揚句、あとで「インタビューを出さないでほしい」というケースが2、3ありましたが、大きなトラブルはありません。先ほどお話しましたが、結婚し、事情が変わったので出さないでほしいというのが1件だけありました。

【質問】

話をしたことによって、その人の行動や考え方が変わったことはありますか。

【岩上】

私はカウンセリングをしているわけではありません。お話を聞いた後、その人が納得できないもの、話したけれど出さないでほしいものは切り落とします。日ごろはUstream中継をしているのですが、中継は編集ができないのでリスクがあります。公人、例えば代議士へのインタビューは、中継でもいいと思います。たとえ私の質問が痛いところを突いて、その人の失言を誘ったとしても、お答え願いたいと思います。でも一般の人の場合は、「話しすぎてしまった」とお感じになれば編集ができる録画でインタビューをしたほうがいいと思います。インタビュー中に泣かれる人が多かったのですが、「泣いた場面は控えてほしい」と言う人にはカットする配慮はしました。特別な秘訣はありません。

【質問】

初対面の人と深い話をされていますが。

【岩上】

会った瞬間に立ち入った質問をしますので、「言わされた」とか「つい言い過ぎてしま

った」と思っている人もいます。カウンセリングはしていないと言いましたが、話したことにより情報や感情の整理がついたり、周囲の人への気づきができたりすることもあるようです。ある主婦の方の話を聞いた時、ご主人への不満があったのですが、聞いているうちにご主人も大変な状況だと思ったので、私が「ご主人も大変ですね」と言ったところ、奥さまが自分のことで一杯になって気づかなかったご主人のつらい立場に気づかれました。その方が「夫婦関係が、気遣うようになってうまくいくようになりました」と言ってくださったこともありました。

【質問】

福島に残った人の中で「迷っている人」、「区切りのつかない人」にとって問題なのは、一つは「情報が増えたため、この先の不透明感が増して不安であること」、もう一つは「地縁や血縁などの絆などが足かせになっていること」とのことですが、インタビューされた中で「区切りがつかない人」が何割かいらっしゃると思いますが、どちらが重たい要因なのか同じ位なのか伺いたい。更に、この人たちに何らかの支援が必要なのか、必要ならどんな公的、政策的支援がいいのかアイデアをお伺いしたい。

【岩上】

先ほども「絆」の話が出ましたが、「絆」という言葉はいい言葉だと思うし、誰にも色々な人との「絆」があると思います。「絆」自体は大切なものですが、3.11以降に意図的に作られた「絆」を強調するキャンペーンの中で「絆」という言葉は一面的なものになってしまった感があります。

例えば人間は働く。その一面では生産者である。その生産者の部分で周りや築いている利害関係の「絆」がある。そうした「絆」は大切にせよと説かれる。かくて生産者の利害は強調されましたが、他方では一人の生活者である点、放射能に侵されやすい人体を持っていて、健康被害の当事者になる可能性のある点、そんな観点から見た時の人との関係に対しての配慮は、あの猛烈な「絆」キャンペーンの中では、軽視されたのではないかと思います。

「絆」という言葉が本来の多面的な意味合いを持つ言葉ではなくなり、テレビを中心に、タレントを使って、とんでもないお金をかけて、広告代理店が作ったパワフルなキャンペーンが行われ、「絆」のある一面だけを強調した。でも人間はたくさんの「絆」を持っていて、別の「絆」が傷んだ部分もあると思います。そうしたデリカシーに欠けていたのではないかと思います。

「絆」が全部悪いわけではないし、「共同体」が悪いわけではないのです。「共同体」の中でお互い助け合いながら生きてきたわけです。その人達との関係性を損なわない避難のあり方や生活の再建の在り方を考えるべきだと思います。

実際、会津には大熊町の人たちが集住している仮設住宅などもあり、バラバラでなく、まとまって避難しているところもあります。県外に出る人を含めて、新たな代替地を供給してそこに新しい村を作ろうとする動きが足りないと思います。「サテライト疎開」とい

うことも提案されましたが、コミュニティーの中心に学校は位置しています。学校が移転するか、そのままなのかは、大変大きな影響があります。学校のスケジュールに家族全員が縛られるというケースがかなりありました。子どもが学校のスケジュールに縛られているため、親が疎開したくても、子どもたちが嫌がるケースも多い。「友だちと別れたくない」「クラブ活動をやめられない」という子どもの心情を考えれば当然だと思います。すごく悩ましい問題です。ある程度除染すれば生活できる所であればともかく、心配な所なら学校単位や地域単位で新しい学校を中心としたコミュニティーを築き直すことがあってもよかったですのではないのでしょうか。また、そのような試みが十分だったかどうかという気がします。

全国には廃校になっている学校がたくさんあります。去年の夏、小田原の廃校を使って福島の子どもたちと家族の保養を目的に避難するプロジェクトをしました。同時に1週間、その廃校で文化祭とうたって集中的にイベントを組んでシンポジウムやトークをしました。その時に、こんなに素晴らしい小田原の海が目の前にある立派な学校が廃校として存在するなら、ここにコミュニティーが丸ごと避難してくればいいのにと私も思いました。また、それはそれで受け入れられるだろうという意見は、地元の方からも福島から来た方からも出ました。しかし、そこまでの大規模疎開となると行政が動かなければなりません。県としては、なるべく県外に人を出したくない。県外に出ていく人は、個人的にリスクを負わねばならない。どちらかという、県外に出ていく人に冷たいのです。国も積極的な支援をしない。地元で留めさせる方向に行政の施策は誘導的だったのではないかと思います。もう少しチャレンジができていれば、状況が変わっていたかもしれません。

キャンペーンで強調された「絆」とは、「そこで留まれ」という意味を含めた「絆」でした。汚染された地から離れて、皆の「絆」丸ごとの新しい可能性、新しい世界を切り開こうというチャレンジをしなかったのです。チャレンジした人は皆、個人だった。ですから大変でした。新しい人生の設計は「個人で切り開かなければいけないもの」と決めつけるのではなく、村単位でデザインすればよかったですのではないかと思います。集落単位での移動は重要なことだと思います。

昭和や明治の三陸の津波被害調査の本を読んだのですが、海岸沿いで集落を築くと同じ目にあいます。そこで高台に集落単位で移住していったという調査記録があります。ところが海岸沿いの土地は商売上も、漁業上も便利なので、一人二人と一部の人間が元の土地に戻り始めると、足並みが崩れてしまい、元の本阿弥になってしまいます。そして、また同じような被害にあってしまったのだそうです。ですから移住するのであればしっかりした計画を立てて、きっぱりと移住した方がいいのではないかと思います。

【質問】

国や県が県外への移住を支援しなかったことが、福島の人たちの選択を苦しめる原因になっているということでしょうか。

【岩上】

そういう風に国や県に問い詰めたら、「そんなことはない」と絶対に言うと思います。

けれども明らかに誘導的だったと思います。おかしいことばかりに突き当たります。根が深いのです。結局のところ、行政の前提は、原発の継続ありきなのです。

原発の継続の必要性を訴える人たちは、電力の不足が問題だと言っていますが、それは違います。多くの方はまだ電力の問題だと思っていますが、電力は足りていますし、原発は経済的でもありません。根にあるのは安全保障の問題や核の問題です。自分の生活をどう再建していくのかは、個人にとっては大きな問題です。「何故なんだ。何故なんだ。行政の対応は何なんだ。県の対応は何なんだ。国の対応は何なんだ。東電の対応は何なんだ」と問わずにはいられない。問うていくと、とんでもなく巨大なテーマに突き当たります。

被災しているだけでも大変なのに、深掘りすればするほど巨大なテーマに突き当たるのは大変つらいことだと思います。ですから、追及をあきらめてしまう。しかし、その巨大なテーマを問わないと、答えが出ないと思います。

【質問】

本を読ませていただいて、物事を考える上で大変参考になりました。この学会の問題意識と関係するのですが、キャリア支援の観点で仕事を失ったり、仕事ができなくなったりした状況の時、その方たちをどう支援していったらよいか。単に仕事でなく、生き方を含んだ意味のキャリアという点から支援をしていく必要があるのか。単純に仕事を斡旋すればいいのか。最後の第30話で登場する大塚愛さんの話では、福島でされていたことを岡山に戻られ、そこで同じようにやり直してみたい、というお話でした。土地も離れているし、現場も違うのですが、彼女のキャリアとしては繋がっているのだろうという印象があります。そのパターンもあり得るのだと思いました。その観点からいくと、30話の中には他にもその様な方がいたように思いました。また先ほどの岩上さんのお話に出てきた女性も、パートナーの方と北海道に移られたそうですが。

【岩上】

そうです。「ココラジ」のパーソナリティで、フリーのライターでもあり、ピラティスのインストラクターの資格も持たれている方です。

【質問】

パートナーの方と一緒に北海道に移られるという大きな決断をされたと思います。彼女の場合にも、アナウンサーの仕事やピラティスの仕事など手に職を持っているという観点から言うと、個人レベルの結婚という問題もあったと同時に、北海道に行っても彼女はキャリアとしてのつながりがあったと感じたので、その点を確認したいと思います。

【岩上】

宍戸さんの場合は、北海道でコミュニティーFMのパーソナリティのお仕事をされているはずですが。「ココラジ」というコミュニティーFMのパーソナリティの仕事をする前は、ライターの仕事をしていたのですが、震災の時には大変な状況下、一生懸命ラジオの仕事をしていました。北海道では大きな仕事を頂きました。初めて北海道の知事と札幌市長が

顔を合わせる大きなイベントの総合司会を任されたと聞いています。ただ、そういう仕事が継続的にできるかどうかは、フリーですので分かりません。彼女の意識の中では、健康のことが最優先でした。いずれは子どもを産みたいと思っているので、自分の体を大事にしようと思っていたのです。一番大事なものは、仕事ではなかった。

仕事に縛られている人ほど動けないのです。健康や生命が重要だと思う人は、今の仕事を断念し、捨て身になって移動し、活路を開こうとするわけです。仕事の継続性が優先ではなかったのかもしれませんが。

彼女の場合は結果として、行ってみたら道が開け、ご縁ができて、チャンスに恵まれたパターンだと思います。彼女はおそらく北海道を中心に新しい仕事にチャレンジをしましょう。あるいは結婚後出産し、家庭に収まるかもしれません。

大塚愛さんの場合は、本当に手に職がある方なのです。大工の徒弟修業をされました。徒弟修業には式次第のようなものがあって、年季奉公があり、年季が明けると年季明けのお祝い、卒業式のようなものがあります。そのお祝いには、田舎からご両親が来て親方が祝ってくれる。そして一人前になっていく。彼女はイニシエーションを経て一人前の大工になった人なのです。女性で大工は珍しいですし、昔ながらの徒弟制の中で腕を磨いた経験も珍しいし、また岡山から福島へ修業に行き、人生を切り開いたというのも珍しいケースです。

今は一時的に大工という仕事をしていません。今後やるのかもしれませんが、今は疲れてしまった感があるのかもしれませんが。福島で築いた生活、原野の土地を借りて自分の腕で自分の家を建てた。自給自足の生活ですが、自分の手で、家と暮らしを作り上げたわけです。そこにご主人がやってきて、一緒に暮らしはじめ、子どもも産み育てた。そうした手作りの家と暮らしのすべてが、原発事故によって失われてしまったのですから、その嘆きは大変深いもので、何もかも再建する方向には、すぐには向かえない気持ちであろうと思います。徐々に今までやろうとしていたものとは少し違う自分の新しい人生のフェーズが生まれたと思い直し、福島でやっていたことと少し違うかもしれないけれども、自分がやるべき仕事、自分のやるべき人生を見つけ出し、いこうという気持ちになっているようです。大工というのは彼女にとっては天職であり、ベルーフだったと思うのです。彼女はとても聡明で意志の強い方なので、また新しい道を切り開かれていくのではないかと思います。

【司会：上西】

ではフロアの方から頂いた意見についてこちらから質問させていただきます。

【大庭】

フロアの方からたくさんご質問をいただいておりますが、3つほど質問させてください。移転した方のキャリアの連続の話を聞いてきましたが、岩上さんがインタビューされた方の中で、「今までしたことのない仕事」を移転先で生き生きとしている方がいらっしゃれば教えてください。

【岩上】

難しいですね。仕事に就けない方はまだまだ多いです。自治体が一種の手当てをくれて猶予期間をくれている、その間に何とかしようと思っっている方が多いのです。新たな道を見出せた方もいらっしゃるが、見出せない方もいらっしゃいます。

納得できない気持ちがずっと渦巻いているのが原発被害の特徴です。津波に襲われた地域は、はっきりとわかります。例えば、宮城県の気仙沼。気仙沼の駅に私も降り立ちました。海岸近くの駅です。そこには津波は来ていない。まるで震災の影響が何もなかったかのような町並みが続く。ところが、海に向かって歩いて行くと、突然建物が無くなる。突然廃墟になるのです。ここまで波が来ました。ここまでは完全に破壊されました。そして、ここからは大丈夫でした。こんな具合に被害を受けたところとそうでないところの境界がはっきりしているのです。地震では建物が倒壊していないのに、津波でやられてしまった所も多いのです。津波が来たところと、来なかったところでは、はっきりとしたコントラストがあります。津波で破壊された地域では、津波の被害からどう立ち直るべきかという問題意識がはっきりしています。

ところが、放射能が高い地域というのはどうか。福島に行かないでメディアからの情報だけで考えていると「さぞかし大変だろう」と思うのですが、行ってみると非常に高い線量のところでも何も変わらない家並みが続いています。何年か経てばそこは廃墟になります。寒々としたゴーストタウンになっていくのでしょうか。私は警戒区域にも行っていますが、大熊町や双葉町でも何も変わらず普通の家々が建っています。私は福島第一原発に行き、入構取材もしています。警戒区域内の自宅に一時帰宅を認められている人もいますが、その人たちは耐えがたい気持ちに襲われるようです。というのは、そこにあるものが物理的には傷ついていないからです。でもマスクをしなくてはなりませんし、線量計で計ればべらぼうな数値が出るのです。その状況をすぐには受け入れられないのです。

酪農家で自殺した方の話は新聞記事になりました。先ほど、生産者の利害に関わることだけが記事になると申し上げましたが、酪農家の方は風評被害の嘆きで亡くなったので大きく報道されました。しかし実は、記事にならない自殺もあるのです。双葉郡に一時帰宅でお帰りになった60代の女性の方は、故郷に変わらず美しい景色が広がっているのを見て、そこを離れたくないと思ったのでしょうか。家庭菜園とかガーデニングの趣味がある方だったので、その場所が大切だったのでしょうか。一時帰宅をされたまま、その住んでいた家で命を絶たれました。他にもそういうケースはあります。ガーデニングで手入れした自宅の家が大事だと思う気持ちは、当の本人でないとわからないだろうと思います。それは仕事ではなく趣味です。ですが、仕事さえあればいいというものではないでしょう。被害を被っていることを納得できない辛さ、津波とは違う原発事故の辛さがあるのです。

【大庭】

失ってしまったのに以前と変わらぬ姿がそこにあり、納得がいけない辛さが次への一歩へなかなか進めないのではないのでしょうか。これに関連するご質問ですが、南相馬に行か

れた方の話では、「パチンコ店の駐車場が一杯で皆さん働く意欲が失われてしまっているようだ」とのことです。働く意欲を取り戻す心のケアなど国や県は何か支援されていますか。また、何が必要だと思いますか。

【岩上】

実は南相馬だけの話ではありません。避難した方は大変苦しいのだけれど、やることのない状態でもあります。先ほど会津の話をしました。会津のパチンコ店や飲み屋に浜通りから避難されている方が行っていることに対して、受け入れている会津の人たちにとっては異様な光景に映るようです。会津の人は一生懸命支援しているのに、避難している方たちは、お金も持っているし、遊んでいるという、そういう不満をよく耳にしました。大都会であれば誰も気づきませんが、よそ者の姿は、地方では際立ってしまいます。受け入れた方には、腹立たしく、不愉快にも映ってしまうのでしょうか。避難している人には憂さもあるので仕方ないし、憂さ晴らしも必要だとは思いますが、そういう人たちへボランティアで支援しようという、話が難しくなるのです。浜通りの人たちの思いもわかります。気候、風土の違う会津に来て、途方にくれている。浜通りの、常磐道の、太平洋に面して、広々とし、冬でも暖かいあの暮らしが恋しくて仕方がないのです。馴染んだ生活に戻りたい。そのために何をするのが一番大切なことだと思います。

【質問】

馴染んだ生活を取り戻すために公的な支援が何かできるとしたら、それは何だと思いますか。

【岩上】

相双地区の双葉町、大熊町、富岡町の人たちは浜通りに戻りたい。だからこそ、同じく浜通りにある福島県南部のいわき市は避難で人が増えたと申し上げました。双葉郡の人たちの4割は原発で働いたことがあり、家族の誰かが働いていたことがある人は過半数を超えます。地域経済、雇用が原発に依存してきたのです。ですので、いわき市やその近くに帰った人も、原発事故によって散々な目にあっているにも関わらず、再び、原発に働きに行っている人もたくさんいます。

「とにかく原発は嫌いだ」と態度を鮮明にし、遠い沖縄に避難をしようとしていた青年から、暫くぶりに連絡がきました。彼は、なんと福島原発内で働いていました。彼はかつて原発労働者ではありませんでした。仕事を見つけれなくても見つけられなくて、結局、浜通りで金を稼ぐために見つけたのは原発の仕事だったのです。原発の代わりに、火力や再生可能エネルギーでも何でもいい、別の発電所を本気で生み出そうとしない限り、地域の経済は好転しない。止めようとしないと、次はないのです。いずれ、形状記憶合金のように、人々はまた原発依存の生活に戻り、ものが言えなくなってしまうのです。

【大庭】

先ほどの岩上さんのお話で、高齢者がお墓を失ったりして大変なご様子がわかりました。

いただいたご質問で、私もとても気になることですが、これからの社会を担う、まだ社会に出ていない小学生、中学生、高校生、大学生の若い世代が、自身の今後のキャリアを考えていくうえで、今回の原発事故はどのような影響を与えるとお考えですか。

【岩上】

ネット用語で、好きな言葉ではないのですが、「危険厨（キケンチュウ）」とか「安全厨」とかという言い方があります。放射能を危険だと見る見方を「危険厨」といい、放射能を特に低線量だったら安全だと見るのを「安全厨」という。情報の流れ方の回路にもはっきりと違いがありますし、どんな情報の中に身を置くか、またどういう関係の中に身を置くかによって入ってくる情報が変わってきます。

ここで話している話がまったく嘘のように全然変わらない生活、マスクなんかしない、一切警戒しない暮らしをしている方が大半です。特に人口の最も多い中通りの方などそうです。そういう方たちにとって、今の「問い」自体、ピンとこない現実があります。他方では悩んでいらっしゃる方も勿論います。放射能の話有谁かがし始めるとうとうとしがりが、苛立たれる方もたくさんいるのが現実です。

【大庭】

今回の原発事故によって生活に全く影響を及ぼされない方もいれば、家族がバラバラになったりして、生活に相当影響を及ぼされている若年層もいるということですね。

【岩上】

生活に全く影響がない人はいないと思います。生活が物理的に破壊された浜通りの、とりわけ海岸に近い相双地区に住んでいた人もいれば、津波には襲われていないし、地震当初はライフラインが途絶えたりして大変だったものの、あくまで最初のインパクトから影響が徐々に低減している中通り地区の方もいます。それとともにまた、原発情報が入っても耳を貸さなかった人、気にもしていない人はたくさんいて、様々な議論をシャットアウトして、風評被害をわざわざ煽り立ててほしくないという立場に立って、放射能の危険性を口にする人たちに対して抑圧的な振舞いをする人もたくさんいます。そういう人たちにとっては、無かったことにして、早く「復興、復興」と叫びたいのです。

問題は、放射能の影響が不確定だということです。その人たちにも小さいお子さんがいて、ご家庭があるわけです。はたして4年、5年後に本当に甲状腺ガンが増えていくかどうか。チェルノブイリの事故以降、ウクライナやベラルーシでは甲状腺ガンだけでなく、あらゆる病気が増えたという報告があります。ここでもそうなるのか。その時、放射能との因果関係がどう語られるのか。揚句、自分たちがどのようにケアされるのかが分からない。静かな時限爆弾を抱えたまま、それが爆発するかどうか分からない状態です。

【大庭】

我々キャリアデザイン学会としてはその現状を見ていくこと。それを把握していくことしかないであろう、今言えることは不確定であるというだけ、ということでしょうか。

【岩上】

私がキャリアデザインという学問のことに不案内なために、うまくお話できなくて申し訳ないと思います。確かに、県の外に出て、色々なものを捨て、決別していく人に対しては、新しい生活を作らないといけませんから、支援の仕方は大いにあると思います。一方、県内にとどまりながら比較的放射能汚染の低い地域に移住して生活している人への支援の仕方があります。それらは支援の設計の方向が全く違うもので、一緒には組み立てられず、別のものとして支援を考える必要があります。

私はどちらも排除してはならないと思います。「危険厨」、「安全厨」の対立が深まっている今だからこそ、両方の話を聞く必要があると思います。もしそうした支援のことを具体的に考えるのならば、両方を分けて考える必要があると思います。

【大庭】

まだまだお話をお伺いしたいところですが、時間も迫ってまいりましたので、これにて質疑応答の時間を終わります。

岩上先生どうもありがとうございました。